九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対談集『教師は弾劾する』

飯田，伸二

https://doi.org/10.15017/8775

出版情報：Stella. 21, pp.181-184, 2002-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

対談集『教師は弾劾する』

飯　田　伸　二

本書はその叢書名からもうかがえるように，中等教育にたずさわるフランス語教員が設立した組織「文芸を救え」がジャーナリストのフィリップ・プティと行った対談集である[1)]。学術研究書ではない本書を俎上にのせることをためらわなかったわけではない。だが，本対談集で 20 巻を数える叢書「明日のための対話」は，すでにクリステヴァ，サルナーヴ，タギエフ，ヴィリリオ，ダゴニエといった現代フランスを代表する作家，知識人，学者らの発言を収めており，言論界に少なからぬ影響力を及ぼしている。また，数年来フランスでは，文学を中心に国語教育が組織・実践されてきた伝統を再検討する動きが顕著であり，第一線の文学研究者が積極的に自国の国語教育に関与・発言している。こうした状況は今後の文学教育・研究に大きな影響を与えかねない。以上の事情をかんがみ，あえて状況が生み出した対談集ともいえる同書をとりあげることにした。

まず「文芸を救え」結成の背景，組織の趣旨について手短に紹介しておこう。この組織は 1999 年の秋に結成された。結成直前の同年 8 月，フランス文部省からリセのフランス語新カリキュラム作成を任された専門家グループはリセ第 2 学年の新カリキュラムを公報に発表した。多くの関係者の目には，このカリキュラムはきわめて野心的，さらには革命的なものに映った。フランス語教育における学習目標の一大転換が計られているからである。すなわち今日のリセ学生の関心や現代社会の動向を踏まえ，文学的教養の養成から，読み書きの実践的な能力の養成へと教育の重点がシフトしたのである。

学習目標の転換は，とりわけカリキュラムの構成，およびカリキュラムが新たに導入した筆記課題に見てとれる。まず構成上の変化は，従来の授業構成の柱であった，学習すべき作家・作品リストが削除された点にある。また筆記課題では創作文（écrits d’invention）が「論説文にかんする課題」にとって代

わった。これらの改革により，従来のフランス語教育を支えてきた文学史や作品解釈は，その理念的重要性ばかりか，制度上のヘゲモニーをも失いかねない[2)]。

従来の文学教育をその根幹においてゆさぶる改革にたいして疑問・反対の声をあげたのは現場のリセ教員だけではなかった。中等教育の教員養成を主要な社会的使命としてきた大学関係者の多くは，新カリキュラム反対の態度をリセ教員よりもいっそう鮮明かつ激しく示した。なかでも 2000 年 3 月 14 日の「ル・モンド」紙にミシェル・ザンク，ミシェル・ジャルティら約 120 名の文学者・文化人が発表した「文学を抹殺するのはグルネル通りだ」は，フランス語教育にかんする国民的な議論をまきおこす契機となった[3)]。

新カリキュラム発表直後に結成された組織「文芸を救え」は，その名が示すように，フランス語教育の現状にきわめて批判的である。彼らからすれば，新カリキュラムは状況を是正するよりは，それを是認・追随しているようにしか見えない。そうした彼らの基本的主張は伝統的な文学＝フランス語教育の擁護であり，そのための活動をいち早く展開した点において彼らは，2000 年春から激しさをましたフランス語教育論争の先鞭をきった組織といえよう。「文芸を救え」が，フランス語教育関係者の注目を集めるようになった決定的な要因は，組織結成と同時に立ち上げられたウェブサイトである。サイトは現場の教員に問題提起の場を提供するだけでなく，新カリキュラムの批判的分析を多数掲載している。また，専門家グループが参照したと考えられる諸資料・報告書，さらには彼ら自身が執筆した論文などにもリンクが貼られている。それに加え，近年新聞雑誌で発表されたフランス語教育にかんするきわめて多種多様の論説・記事も収めている。管見のかぎり，同サイトはその資料的な充実において秀逸であり，今日のフランス語教育を考えるうえで参照不可欠のサイトである[4)]。

本書がフランス語教育の現状を憂い，「文学史＋ディセルタシオン」中心の教育に郷愁をいだく教員達のマニフェストであるだけでなく，フランス語教育・文学教育に関心を抱く読者の知的好奇心に応える書物に仕上がっているのは，対談での発言がこうした資料的な裏づけに基づいているからである。じじつ対談を一読することで，1999 年の新カリキュラム発表に至った経緯や，その根本的原因，つまり 80 年代からの中等教育の大々的な民主化による教育環境の劇

的な変化について，かなり具体的な見取り図を描くことができる。

対談集の構成を略述しておこう。本書は「超改革派と超教育派による権力の奪取」,「新しい人間製造所，言語と市民」,「従属を生み出す教育」,「文学のまとう新たな衣装」の 4 章からなる。第 1 章は，フランス語教育がここ 30 年来，記号論を過度に重視する文学研究者・視察官によって大きく歪められている事実を指摘し（たとえばアラン・ヴィアラを座長とする専門家グループに名を列ねている大学人は，文学への記号論的アプローチで知られるアンドレ・プチジャンとベルトラン・ドニである），ある特定の方法論に極端にかたよった教育改革が，リセにおける文学教養の貧弱化に拍車をかけていると指弾している。第 2 章は，すでにコレージュではオーラル・コミュニケーションが極度に重視されるあまり，それを引き継ぐリセでも文法教育・作文教育に重点をおく余裕がなくなる危険に警鐘を鳴らしている。さらに新カリキュラム対応のリセ用フランス語教科書を例にあげながら，新しい教育体制の下では文学が道徳教育の道具の一つに成り下がりかねない恐れにも読者の注意を促している。第 3 章は，1989 年に設立された IUFM（教員養成大学院 Institut Universitaire de Formation des Maîtres）への批判に割かれている。多くの関係者・学生の抵抗にもかかわらず，IUFM の教育は各科目の専門的知識・教養の涵養ではなく，教育方法の伝達に重きを置きすぎていると指摘する。この傾向が続けば，文化・知の伝達の場としての学校・授業の意義がますます弱まることが危惧される。最終の第 4 章の大半は，新カリキュラムで採用され，2002 年のバカロレアから出題されている創作文への批判に費やされている。創作文とは，指定された内容（たとえばある作品中の登場人物の言動，ある文学作品への称賛・批判）を，指定された形式（たとえば書簡，対話，寓話，新聞記事）で書く課題である。つまり受験者が自らの解釈，考えを論理的な文章で表現するという，第 3 共和政以降のフランス語教育の究極の目標に真っ向から反するわけである。著者たちからすれば，創作文の是非をめぐる議論は，フランス語教育における単なる新旧論争ではなく，学校が社会で占める役割にかんする本質的議論に通ずる。なぜなら彼らからすれば，創作文の導入は文学的教養を伝えるためのフランス語教育の終焉を意味するだけではないからだ。それは，質の高い教育をつうじ万人の批判精神を養うことを目標とすべき公教育が自らの責任を放棄することをも意味する象徴的な出来事なのである。

豊富な資料に基づいてフランス語教育の現状を批判的に分析する現職教員の声は傾聴に値する。だが現状を打開するための具体的な提言が本書を通じてなされているとは言いがたいのは残念である。もっとも，長年の中等教育での経験を大学での文学研究・教育の改革に生かしたランソンのことを思えば，今日方法論的には袋小路に入り込んでしまった観のある文学研究の今後にとっても，本対談集のような教育現場からの問題提起は示唆に満ちた発言と結論づけられるのではないだろうか[5)]。

註

1）*Des professeurs accusent* / Sauver les lettres, Paris : Les Éditions Textuel, coll. «Conversation pour demain», 2001, 156 pp.

2）詳細は，日仏教育学会年報第 8 号に掲載予定の拙稿「岐路に立つフランス語教育：新プログラムが問いかけるもの」を参照願いたい。

3）«C'est la littérature qu'on assassine rue de Grenelle», *Le Monde*, 4 mars 2000, p. 18. 同じ頁には，100 人以上のリセ教員が署名した「ディセルタシオン廃止に反対する」も掲載された（Fanny Capel et Emmeline Renard, «Contre la suppression de la dissertation», *ibid.*）。この議論の最中，2000 年 5 月 6 日には，ミッシェル・ジャルティの呼びかけのもと，ソルボンヌの大講堂で新カリキュラムにかんするコロックが開催された。これには中等教員だけでなく，文学研究者・作家・哲学者・歴史家，そして「専門家グループ」議長のアラン・ヴィアラが参加している。参加者の発言は以下で読むことができる―― *Propositions pour les enseignements littéraires*, sous la direction de Michel Jarrety, Paris: PUF, 2000, 192 pp.

4）サイトのアドレスは http://www.sauv.net/ である。

5）この点にかんしては以下を参照―― Antoine Compagnon, *La Troisième République des lettres : de Flaubert à Proust*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Poétique», 1983, 384 pp.